

平成22年7月の解説（府県天気予報）

【7月の天候状況】

上旬は、梅雨前線が本州南岸に停滞することが多く、北日本へも暖かく湿った空気が流れ込んだため、全国的に曇りや雨の日が多くなりました。また各地で大雨となった所がありました。中旬は、中頃まで梅雨前線が本州付近から日本海に停滞し非常に暖かく湿った空気が流れ込んだため、東・西日本では大雨となり、浸水害や土砂災害が発生したところもありました。その後は、高気圧に覆われ晴れて気温が上がりました。北日本では、気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなりました。沖縄・奄美は高気圧に覆われ晴れる日が多くなりました。下旬は、東・西日本は高気圧に覆われ、東日本を中心に最高気温が35以上の猛暑日となるなど各地で厳しい暑さが続きました。北日本では、気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなりました。沖縄・奄美は湿った空気が流れ込んだため、曇りで雨の降る日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東日本では平年より多くなりましたが、北日本と沖縄・奄美ではかなり少なくなり、7月の月間日照時間の最小値を更新した気象官署がありました。降水量は北日本と沖縄・奄美でかなり多くなり、北海道では7月の月降水量の最大値を更新した気象官署がありました。気温は、北・東日本では平年よりかなり高くなり、7月の月平均気温の最高値を更新した気象官署がありました。西日本は平年より高くなりました。

【7月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報で80%と例年^(注)より1ポイント高く、明後日予報では74%と例年並みになりました。地域毎の適中率では、明日予報は東海、九州北部地方で6ポイント高くなりましたが、東北、九州南部、沖縄地方では5から6ポイント低くなりました。明後日予報は中国、九州南部地方ではそれぞれ11ポイントと6ポイント高くなりましたが、東北、関東甲信地方ではそれぞれ5ポイントと9ポイント低くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、大半の地方が例年より0.3前後小さくなり、全国平均では0.3 小さい1.6 でした。最低気温の予報誤差は大半の地方がほぼ例年並みとなり、全国平均では0.1 小さい1.1 でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の天気予報の利用にあたって】

日本に大きな災害をもたらした台風の多くは、9月に日本へ接近・上陸しています。特に昭和以後、死者と行方不明者を合わせて1000名以上となった台風6個は、いずれも9月に接近・上陸しています。この中で、伊勢湾台風(昭和34年台風第15号)は主に高潮により最大の犠牲者を出しました。高潮について海外に目を向けると、2005年のハリケーン・カトリーナはフロリダに壊滅的な被害をもたらし、死者も2000人近くになりました。気象庁では高潮について市町村ごとに警報を発表しています。大雨や暴風警報などと共に、高潮警報も防災に役立てて下さい。